

2022年4月1日

2021年度国際教養学部FD活動報告書

2021年度国際教養学部FD委員会委員 安原毅

2021年度は前年度に引き続き新型コロナ禍でオンライン授業が多かったが、徐々に対面授業に切り替えられ正常な授業も行われるようになった。そんな中でハイブリッド型授業の実施方法など、新たな問題も浮き彫りになった。

1. 当初計画

1. 円滑な授業実施
2. FD勉強会・報告会の開催
3. 教育効果の点検評価
4. 教員相互の授業参観の促進
5. 新型コロナ禍における遠隔授業について(新規)

2. 2021年度活動報告

1. 円滑な授業実施

今年度の2年次生にとってはオンライン授業にストレスを感じる者も見られる。その一方で同学年でも、オンライン授業がむしろノーマルケースと捉えている学生もいるようだ。

2. FD勉強会・報告会の開催

1) 2021年9月22日 自16:30至17:30(教授会終了後) @701 FD研修会「オンライン授業の在り方、オンライン授業と対面授業のバランスについて」

レポートの質が対面授業のころに比べ悪くなっている。

特に一部の2年次生にとっては、オンラインが当たり前と感じられており、わざわざ対面に戻す意味がわからないといった意見も見られた。

2年生はオンライン授業についてかなりストレスを感じている様子であった。一方で、うまく乗り越える方法を見つけている学生もいるようである。

学生に対しては、授業形態について、折に触れ丁寧に発信していくべきである。

2) 2021年12月15日 自16:45至18:00 @Q606 「3つのポリシーに関する検討・報告会」

・カリキュラム・ポリシーに関して：

「人文科学に基礎を置き」とあるが、人文科学という表現は「人文学」の方が一般的である。また社会科学系の授業が実際には多いので、この表記は改める方が良い。

『グローバル・スタディーズ』を主軸とし、、、それを補完するものとして、、、『サステイナビリティ・スタディーズ』によって教育課程を編成する」の表現について、実際にはグ

ローバル・スタディーズとサステナビリティ・スタディーズは対等の位置付けかむしろ後者に比重が置かれているので、この記述は修正すべきである。

とくに現在のコロナ禍では、アリゾナ州立大学との COIL による交換授業は留学に代わる重要な意義を持つものになっている。

・ディプロマ・ポリシーに関して：

従来のカリキュラムでは第三言語でのコミュニケーション能力が身に着く学生は少ないので、ディプロマ・ポリシーの表現は現実と合わない。この点は新カリキュラムに移行して、改善が期待できるかもしれない。

・アドミッション・ポリシーに関して：

現在の高校で行われている科目との対応関係を書いた方が、より趣旨が明確になる。

・現行の授業カリキュラムの検討

英語運用能力に限ってみても現在の学部生は、アリゾナ州立大学の学生との討論などある程度のディベートは可能だが、学術書を読み内容を理解するには能力が不十分である。

多くの学生は SDGs、民族差別など一般的に知られるテーマに対する関心が高い一方で、それらを分析・理解するための学術ディシプリンの理解が不足している。

とはいえ、現行以上に科目を増設することは困難である。

3) 2022年 02月 02日（水）自 16:15 至 15:30 オンライン会議「学部教員による卒業論文指導の情報交換 第1回」

この FD 活動は昨年から継続したもので、今回は平岩先生、籠橋先生、神崎先生、村杉先生、森泉先生、大竹先生、中村先生が各自持ち時間5分で報告した。いずれのゼミも人数が多くテーマも様々なため、指導に手間取ったことが報告された。その一方で多くの学生は具体的な問題点を取り上げてフィールドワークに基づく論文を仕上げたことは高く評価された。

4) 2022年 02月 19日（土）自 12:30 至 13:30 オンライン会議「学部教員による卒業論文指導の情報交換 第2回」

今回は森山先生、鹿野先生、山岸先生、斎藤先生、後藤先生、Volpe 先生、安原が各自持ち時間5分で発表した。年末休みを経ても書き始められない学生がいたり、オンラインでは指導の意図が伝わりにくいなど反省点が挙げられた。他方で、数量分析に取り組んだり、ガンジーやマザーテレサの思想を深く学ぶ学生もいたなど、肯定的な評価もあった。

### 3. 教育効果の点検評価

2のFD勉強会・報告会3)、4)にあるとおり、卒論作成については各教員の積極的な努力のおかげで教育効果の上昇がみられたケースが多かった。

アリゾナ州立大学との COIL を用いた交換授業は、コロナ禍で渡航が困難な今特に重要と思われる。COIL を使えば国内にいても積極的な討論ができることは、学部広報の視点からもアピールしてもよい。

2022 年度にはすべての授業が対面になるので、オンラインでは不可能だったアクティブ・ラーニングを今まで以上に取り入れる必要がある。

#### 4. 教員相互の授業参観の促進

残念ながら学科としてはこの点は実現できなかった。何人かの教員間では自主的に相互の授業について情報交換が行われており、今後整備すべきである。

#### 5. 新型コロナ禍における遠隔授業について

2021 年度にはハイブリッド授業と対面授業が混在する形になり、教材等の準備に手間取ったケースもあった。

### 3. 点検評価と将来の改善

#### 1. 効果が上がっている事項

卒業論文の作成に関する報告会によってお互いの教育内容が改めて確認されただけでなく、各教員の情報を全体で共有できた。

オンライン授業やハイブリッド授業に関する各教員の授業での学生の反応を報告しあうことで、全体的に学生がどういう意識でいるのか再確認できた。

#### 2. 改善を要する事項

前年度から持ち越した問題だが、教員間の授業参観は実現できなかった。

カリキュラム・ポリシーやディプロマ・ポリシーについては全員で問題を提起しあった。それを統一した方向にまとめるのは今後の作業である。

#### 3. 将来の発展事項

特にディプロマ・ポリシーについては、学科全体としての学習効果の検証方法を具体化してゆくべきである。

以上